
サクラ＊サクラ

井沢あや

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

サクラ*サクラ

【Nコード】

N3731A

【作者名】

井沢あや

【あらすじ】

桜の話。桜と同じ名前を持つ少女の苦悩。私なりに、生きる理由を考えてみました。

風が吹いても、その蕾を固く閉じた桜は散ったりしない。あたしは胸を撫で下ろした。

春なんて来なければいい。そうすれば、桜は永遠に散らずに済むから。

散るからこそ美しいなんて、あたしは思えない。散ってしまった桜になんて、みんな見向きもしないでしょ？ゴミの様に踏み潰される花弁を見る度に、あたしは言いようのない悲しみに襲われるんだ。

あたしの名前は先谷 サクラ。

桜は言わば、あたしの分身。あたしそのもの。

もうすぐあたしの季節が来る。

春なんか、大っ嫌い。

「でもさ、それっておかしくない？散るとかどうとか以前に、桜は咲かなきゃ見れないじゃない」

親友の叶恵はあたしの前の席、本当は高木くんの席なんだけど、そこに座って話している。

あたしが例の話をしたら、妙につっかかってきて。ちょっとした口論になってしまった。

「いいの。あたし、満開になるのは一生に一度で十分よ」

「サクラじゃなくて、桜の話をしてるの！混乱させないで」

「どっちもあたしよ？」

しらつと言ってみせると、叶恵はウザそうに目を細めた。

「それ、本気で言ってるならかなりイタイけど」

本気だけど、あたしは別に、と答えた。アタマのおかしな娘だとは思われたくないからね。

「じゃあ、桜は必要無いのね？それなら安心でしょ？」

「ううん。平穩無事に佇んでる桜の木を見てるのが好きなの」
バカみたい、って叶恵は笑った。

「真冬のカサカサな桜なんて、他のと見分けつかないわよ」

「あたしはつく」

「普通はつかないの！」

ああ、どうやらこの口論に終わりは無さそうだ。だって、あたしも叶恵も意見を変える気なんて始めからないんだもの。

あたしは気付かれないようにそっと溜め息をついた。

ちようどいい時にチャイムが鳴ってくれて、叶恵は席へと戻っていった。次の休み時間までには、今の話を忘れてくれているといいな。

あたしはその一時間のほとんどを、グラウンドの青々とした桜を見るのに費やした。

ここにも桜……。

まだ誰にも気付かれずに、桜は静かに立っている。

「あなたは、綺麗に咲いて歓声を浴びることが幸せなの？」

あたしは分からなくて問いかけた。桜は真っ直ぐ立っているだけ。

「幸せ、なのかな……」

平穩無事な桜の木は、安心するけどどこか物足りない感じ。

「さつきからさ、なんで木に話しかけてんの？」

「え……？」

一瞬、桜に話しかけられたかと思った。だけどそこまでオカシクはなれなかったみたいで、犯人は背後に立っていた男。

「アタマ、大丈夫？」

目の前まで歩いてきた男は自分の頭を指差しながら、何故か爽やかに笑った。

「盗み見てるなんて、趣味悪いのね」

あたしの悩みなんて何にも知らないくせに。

「これ、桜だろ？好きなの？」

「あたしなのよ。これは」

男は何故か、見分けがつかない筈の桜の木を知っていた。ピンク色じゃない桜を分かってくれた。

「早く春にならないかな。ポカポカ気持ち良くてさ、桜の華がいっぱい咲いて。俺、春が一番好き」

「ねえ、その誰かさん。あたしは春なんて大っ嫌い！二度とあたしの前でそんな事言わないで」

あたしは憤慨した。悩みに追い討ちをかける言動は、とにかく控えてほしかった。

歩き去ろうとするあたしを、男のでっかい手が引き留めた。掴まれた手が、暖かい。

けれど男の顔には怒りが浮かんでいて……。これって逆ギレ？

「お嬢ちゃん、理由を聞かせて貰おうか。春の何処が嫌いなんだよ！この世に春の嫌いな奴が居るなんて信じらんねえよ」

それほど年が離れているようにには思えないのに、明らかにあたしを下として見ているこの男。ムカつく。

「結構いるわよ。花粉症の人が大勢」

「それは……病気なんだから仕方ないだろ。質問に答える」

あたしはしようがなく、今一番の悩みを告白した。なんでこんな奴に……。

「お前、バツカだなあ〜！そんな理由で春が嫌いな訳？桜は、次の年また綺麗に咲くために散るんだよ。華だって、晴れ目を見ずに死んで行くなんて嫌に決まってる」

「でも、泣いてるの！毎年、毎年、桜が散るたびに泣いてる気がする

る……」

何よりも、笑い飛ばされたことが悲しい。

「それは嬉し涙だ。なあ、華って何であんなに綺麗なのか知ってるか？」

あたしは首を振る。そんなこと、考えたことすらなかった。

「人を魅了するため」

「何それ」

こいつはきつと、天性の大ほら吹きだ。

「桜は昔から、人の心を掴んで離さないんだよ」

「だから？」

「だから毎年綺麗に咲くのが、桜にとっての一番の幸せだよ」

「なんで？」

男は口の端をニツと持ち上げた。無邪気な顔……。桜のピンクが似合いそうな笑顔だと、何故かあたしは思った。

「まだわかんねえの？桜は人々を魅了して、幸せにするのが幸せなんだよ！」

「あたしは……、あたしはそんなの信じらんない」

幸せって何？桜が散る度、死にたくなる程苦しいあたしの幸せは？桜は何であんなに真っ直ぐ立つてられるの……？

「だって、もしそれが本当なら、桜はあたしなんかじゃない……」

裏切られた様な気持ちになった。元からあたしが一人で考え、一人で悩んでる妄想にしか過ぎないのに、バカみたい。

- - バカみたいで、切ない。

「いや、そっくりだ」

人より茶色の濃い瞳に、あたしが映った。彼のガラス玉の中で、あたしがグラグラと揺れる。

「なにが？何に……？？」

「お前が、桜に？」

「何で疑問系？」

「何でだろうな」

お互い、短く、テンポ良く会話を進める。　あたし達を観てるのは桜だけ。

「あたし昔から、桜と一心同体のような気がしてた。思い上がりだけど」

「桜の華やかさなんて少しも無いけど。……桜はあたしを理解してくれる気がした」

「春の桜より、秋や冬の桜の方があたしと近かった」

「嫉妬してたのかも。名前は同じなのに、春になると見違えるように綺麗になつて、みんなに注目してもらえる桜に……」

「あたしはいつも隅の方に座って、中心を眺めてるような子だったから」

「……桜を独り占めしたい」

「あたしは花びらを踏んづけたりしないし、誰よりも桜の気持ちが分かるから」

「そうだよね？」

男は一言も言葉を発さなかった。ただ、じつとあたしを見据えて、あたしのお話を聞いてくれる。

その様子は、幼い頃に話を聞いてくれた桜の木にそっくりで……。穏やかで、たくましくて、寛大な桜が見えた気がした。

あたしは口をつぐんだ。自分があまりに幼稚で、くだらない事を

言っているのに気付いたから。

「桜にそっくりなのは、あなたの方よ……」

男は桜色に微笑む。華やかな笑顔、無表情なあたしとはやっぱり真逆。

「俺は、桜だからな」

「じゃあ教えてよ。あたしはどうすればいい……?」

「簡単じゃん。自分らしくしてればいい。少しでも幸せになれるように」 そんなこと簡単に言わないで欲しい。自分らしく居ることの、なんて難しい事だろう。

「いつものサクラらしくさ。桜に悩みきいてもらうくらいでいいんじゃない?」

いつものあたしなんて、知らないくせに。優しい嘘は、優しくなれないんだから。

「人も桜も関係ない。この地球上に生きる全ての命は、きっと幸せを求めて生きてるんだ。幸せを探すために、産まれて来る」

「桜も……?」

男は質問には答えなかった。その代わりに、桜色の笑顔が満開に咲いた。それが返事。

「また来いよな。待ってるからさ。春になったら、ぜってえ来いよ」

「うん……。分かった」

男は名残惜しそうに肩を潜めて、もう一度微かに微笑んだ。

あたしも少し寂しく感じて、男にそつと微笑み返した。

「サクラのために、満開に咲いててやるからさ」

あたしは突風に思わず目を瞑り、再びゆっくりと開いた。

空中から、ひらりと一枚の葉が落ちる。押し花になってるピンクの花びら。

男は、声だけを余韻として残して、跡形も無く消えてしまった。

「桜……?」

甦る。昔よく一緒に遊んでいた男の子の事。いつもそばで満開に咲いてた大きな桜の木の事。

そう言えばよくあの子に慰めてもらってた。

あの子は誰だった？いつ知り合った？思い出せない……。

今の男は誰だった……？どうしてあたしの事を知ってるかのよう
に話してたの？

「消えてしまつてから気付くなんて……」

あの男は、あの時の子だ。じゃあ、また来いよつて言うのは？こ
こ？それとも……。

「春になったら、また会えるよね？」

あたしは前を向いて歩き出した。シャンと背筋を伸ばして。さあ、
幸せを探しに行こうか。

桜、桜、ピンク色に輝く桜。

桜が満開になるころに、あなたに会いに行きます。

サクラは桜と共に……。

F i n n *

(後書き)

結局は、どんな形であろうと皆欲しいのは幸せ。産まれて、死んでいくことに、意味なんて無いかも知れないけど、それでも人が生きようとするのは、先にある幸せを求めらるからだと思う。未来に幸せが欠片も見えなくなってしまったら、人は死を選ぶのかな……？
そんな世の中ではあってほしくないと思う今日この頃です。
では、ここまで読んで下さりありがとうございます。意見・感想など、お待ちしております！

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3731a/>

サクラ*サクラ

2008年11月7日07時53分発行